様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月 １４ 日現在

機関番号：３５３０２
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2013～2015
課題番号：２５５８０１１５

研究課題名（和文）相互理解を促す日中異文化間コミュニケーションの探索－葛藤発生と融和の微視的分析

研究課題名（英文）Exploration of Japanese-Chinese Intercultural Communication to Facilitate Mutual Understanding: Microscopic Analyses of Conflict and Harmony

研究代表者
奥西　有理（Okunishi, Yuri）

岡山理科大学・教育学部・准教授

研究者番号：５０４４８１５６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,200,000円

研究成果の概要（和文）：　日中間の異文化摩擦とコミュニケーション上の誤解について、比較文化研究および異文化接触研究を行った。その結果、日中の価値観の違いの本質が浮かび上がった。例えば、労働観については、中国人大学生が濃密な人間関係を築いて集団としての成果を成し遂げることを志向するのに対し、日本人大学生は、成果とは個人によって成し遂げるものであり、その貢献先として国家や社会が想定されているのではないかと考えられた。また、日中の異文化理解は、相容れない部分はどこなのかについて深く分析し境界線を見極めることで実現すること等有効に機能する複数の方法が明らかとなった。

研究成果の概要（英文）：Comparative cross-cultural and contact studies were conducted to identify the possible causes and mechanisms of intercultural conflicts between the Japanese and Chinese. As a result, essential differences in Japanese and Chinese’ sense of values have been clarified. For example, regarding work-related values, Chinese university students tend to seek good human relationships to accomplish their collective goals, whereas Japanese university students tend to think that goals are to be accomplished by individual efforts while being consciousness of their contribution to the nation or society. Moreover, effective ways of coordinating the two distinctively different cultures were found. For example, cultural understanding can be achieved by drawing a line between the cultures based on a deep analysis of them.

研究分野：異文化間教育

キーワード：異文化理解　異文化葛藤

１．研究開始当初の背景

日本における異文化間コミュニケーション研究は、1970 年代「対欧米」の視点から始まり発展した。文化的な特徴が対比的に描き出され、効果的コミュニケーションのための提案が多数行われた。例えば、高コンテキスト文化を持つ日本に対し低コンテキスト文化を持つアメリカなど欧米というモデルや、集団主義文化を持つ日本に対して個人主義文化を持つアメリカなど欧米というモデルに基づく異文化葛藤の解決手段が提案された。その結果、日本において、「対欧米」コミュニケーション方法に関する共通理解は広がっていった。

その一方で、「対アジア」のコミュニケーション研究に関しては、極端に不足しているという現状がある。そもそも実際の異文化接触事例の研究を行い、「対アジア」コミュニケーション理論を発展させようとする発想自体も乏しかったといえる。

今日の急激なグローバル化の流れの中で、アジアから留学生の大規模受け入れ、観光客の増加、政府間や民間の国際交流の急増がみられる。特に、ビジネスや学術的交流でつながりが深く、最多数の在日外国人でもある中国人との異文化間コミュニケーションの必要性は高い。日本人にとって中国人の考え方や行動は理解困難とされ（中島, 2011; 奥西, 2012）、相互理解や関係性構築は難解であると考えられてきた。

２．研究の目的

本研究では日中がどのように理解し合うことができるのか、どうすれば歩み寄れるのかについて、誤解のメカニズムの解明を実証研究に基づいて具体的に示し、説明理論と解決モデルへ足がかりを築くことを目的とした。具体的には、以下の 4 つの研究を実施した。

研究（１）在日中国人を対象とした異文化葛藤事例および文化調整方法の抽出

研究（２）想定法による日中文化的差異の質的検証

研究（３）日中比較文化調査による文化的差異の量的検証

研究（４）日中比較文化調査による文化的差異の質的検証

３．研究の方法

研究（１）～（４）につき、以下の方法をそれぞれ採用した。

（１）在日中国人就労者６名を対象とした面接を実施し、質的分析を行った。来日してから現在の国際系キャリアに就くまでのライフストーリーについての語りを、SCAT: Steps for Coding and Theorization(大谷, 2011) を用いて分析した。

（２）4 つの日中葛藤を扱ったショートストーリーを用意し、葛藤発生原因と解決方法について日中双方の大学生 26 名に尋ねた。葛藤のテーマは、面子、人間関係、友達との関係、親との関係であった。中国人研究者および日本人研究者と協同で聞き取りデータの質的分析を実施した。

（３）対象と手続き　中国人学生 114 名および日本人学生 109 名、計 223 名を調査対象とした。2013 年 9 月に中国南部の都市 J 大学にて、また、2014 年の 1 月および 7 月に西日本の都市にある 0 大学にて質問紙を配布・回収した。ホフステード（1987）の労働に関する国際比較質問項目を一部改定して使用した。理想と思う仕事のあり方に関する 34 項目について 5 件法で回答を求めた。日中大学生間のそれぞれの質問項目に関する差異について t 検定を用いた分析を行った。続いて日中大学生それぞれの持つ労働観について、探索的因子分析を行った。

（４）日中の大学生 26 名を対象として、4 つの葛藤事例に対する解釈を聞き取り、質的分析を行った。2013 年の 9 月に中国南部の大都市にある A 大学において、2014 年 1 月～7 月の間に西日本の中都市にある B 大学において、質問紙を配布した。回答は自由記述式で、1)「競争」という言葉から連想することを挙げてください、2)「国際化」というのはどういうことだと思いますか、と尋ねた。中国人の研究者 1 名と日本人の研究者 2 名によって、KJ 法により分析した。

４．研究成果

研究（１）～（４）の主な研究成果については以下の通りである。

（１）在日中国人人材は、日本文化や自らの背景にある中国文化に対する分析を深めつつ、両文化の間に立って、適応・不適応という二分論では説明しつくせない複雑な対応を行っていた。グローバルリーダーとしての一つのモデル像ともいえる両文化の中立的位置に立ち位置を持った異文化間の調整だけではなく、両文化の中間に立とうとしてそれが出来ずに混乱したり、中国文化寄りに立ち、日本文化の中で葛藤させない範囲で中国式を貫いたり、日本人ホストを中国理解に誘ったりしていた。ゲストが自分にとって難易度の高いホスト文化の要素に直面している場合、中間地点に立って両文化を融和するというオーセンティックな方法だけでなく、日本側を中国文化理解に引き寄せて妥協を導くという対応や、相互理解を志向せず両文化を干渉させないことで葛藤を避けるといった対応も現実的かつ効果的であるあろうと思われた。互いを理解しようと理念的に考えて感情的な歩み寄りを試みるだけではなく、どのような違いなのかを詳しく学び、完全には理解できない、融和し得ないことがあることを前提とした両文化の調整方法について現実的に検討していくことが、今後の日中間のあらゆるレベルの関係の改善に貢献する

可能性があると考えらえた。

（2）面子においてポジティブな志向性を持つものとネガティブな志向性を持つものが見いだされた。前者は、近しい人からの称賛により得られる自己評価、後者は他者からプライドや名声を傷つけられることと関連していた。また、友達とのグアンシー（関係）に関して、「友人の友人を自分の友人とみなす」「時間的に
限られた機会であっても友人に会う意欲を示す」「友人のためを思って友人の失敗や不適切さを率直に指摘する」等、中国人に特有と考えられる特徴が見いだされた。加えて、中国人にとって親孝行とは、生活が安定しているということを親に対して行動で示すことや、忠誠心を示すために親に贈り物をする行動等を含んでいた。4つのストーリーを日本人学生に解釈させることを試みたが、難解で、解釈自体が不可能という場合も多く見られた。中国的な文化的価値観に基づいた正しい解釈は、日本人学生にとってはほとんど不可能であったといえる。特に研究室で面子を失う状況を扱ったストーリー１において、中国人大学生が面子の問題だと解明できたのに対し、日本人大学生の多くは、集団主義的な価値観に基づく他者への従順な態度が欠落している問題だとして捉えていた。このような分析から次の5つの対比する文化的価値観が見いだされた。1) 個人の面子の尊重 v.s. グループの意見の一致の尊重 2) 友情維持において計画性より情熱を優先 v.s. 友情維持において予約と効率を優先　3) 広範囲な人脈形成 v.s. 限定的人間関係 4) 親しい友人間でのオープンさと率直さ v.s. 遠慮及び相手に敬意を払う距離間の維持 5) 社会的に認知された子から親への恩返し v.s. 親から子への一方的献身

（3）t 検定の結果、「望ましい地域に住む」(t=2.517, df=212.426)、「技術向上や習得の機会」(t=4.732, df=220)、「福利厚生の充実」(t=3.301, df=221)、「生活への十分な時間的余裕」(t=2.084, df=221)、「個室で仕事」(t=2.755, df=220)、「所属長が決定前に部下に相談」(t=3.689, df=221)、「昇進と高い評価の機会」(t=3.853, df=220)、「社会的評価と業績の高い会社に勤める」(t=4.031, df=220)、「職場の人とプライベートでもよい関係」(t=2.128, df=208.858)、「協力して困難な仕事をやり遂げる」(t=2.062, df=207.748)、「大きな仕事のできるチームで成果を上げる」(t=2.910, df=217)、「家族のように親密に助け合う」(t=2.367, df=221)の12項目では中国人大学生、「いい仕事をした時認めてもらう」(t=-1.978, df=216)、「終身雇用の保障など雇用の安定」(t=-3.968, df=219.848)、「個人単位で仕事を評価してもらう」(t=-2.779, df=220)の3項目では日本人学生による評価の方が、有意に高い値を示した（p< .05)。日本人学生にとって仕事は、安定した環境の中で自己実現を図っていくものであると考えるのに対し、中国人学生は社会的評価や経済的価値や集団としての達成に、より重きを置いていることが示唆された。因子分析の結果、中国人学生については、1)達成志向的集団主義、2)労働条件の重視の 2 因子が抽出された(表 1)。一方、日本人学生については、1)相互依存志向的集団主義、2)安定的職場環境、 3)国家・社会における個人の活躍という3因子が抽出された。仕事に対する価値観は、日本と中国では、同じように集団主義的な価値観をベースとしていたものの、志向性において質的な異なりがみられた。日本の大学生は、相互依存的な人間関係自体を志向するにとどまるのに対し、中国人大学生は、濃密な人間関係を用いて集団としての成果を成し遂げることを志向していた。一方で、日本人大学生にとって、成果は個人によって成し遂げられるものであり、その貢献先として国家や社会が想定されているのではないかと考えられた。また、日本人大学生が、安定的な職場環境という実質的な心地よさを求めるのに対し、中国人大学生は、労働条件に注目しており、可視的な条件面を重視する傾向にあることが示唆された。

（4）「競争」、「国際化」ともに、日中の学生間で捉え方における共通点と相違点が見られた。まず、「競争」からの連想をみると、日本人学生が、「スポーツ」「運動会」等、順位付けが必要となる特殊な機会に登場する営みという捉え方が目立った。中国人学生では、競争の結果発生する利点や、競争に伴う感情、競争の理由や必然性についての記載が頻出しており、競争場面はより日常的に経験しているものであることが伺えた。また、「競争」に相反するイメージと思われる、「協力」に関連した言葉を挙げた者も多く、競争は必ずしも一人で戦うイメージばかりではなく、仲間同志が協力して同じ目的を達成したり、利益共同体として所属集団の協働が機能したりする競争形態があること、個人がお互いに高め合うという意味で、競争は協力に通じるという解釈もあることが分かった。「国際化」の解釈をみていくと、日本人学生の上位は、総じて肯定的なイメージで占められていた。「友好交流」「異文化理解」が大多数を占め、その後「英語」が続いていた。仲間同志のつながりが国境を超えて広がっていくイメージを抱いていると考えられた。国や文化が違う異質なものが存在することは意識されにくく、されたとしても「異文化理解」という融和的な折り合いが可能であるという理念で捉えられていた。そして、そのつながるための言語として「英語」が位置づけられているという構図がみてとれた。一方で、中国人学生の持つ「国際化」に対するイメージはより多岐にわたり、多義的な解釈をしてい

た。「文化の融合」が第一位を占め、次に「経済」が続く。文化の融合については、日本人学生の持つ同質の仲間が広がっていくイメージとは異なっていた。“価値観の面で小異を残して大同に就くこと”、“文化が多様性を持ち、互いに包容すること”、“外来文化を包容し、むやみに拒否するのではなくひたすら受け入れるのでもない”といった記述例があり、そこから伺えることは、異なる他者の存在を大前提としているということであった。その上で、仲間としての一体化の発生を目指すよりも異質な他者を寛容に受け止めるという方法で文化の融合的な併存を思い描いていると考えられた。この異質な他者との共生に対するスタンスという点において、日本人と中国人の国際化に関する世界観は、相当の相違を含んだものになっていると推測された。日本人学生が「国際化」を、精神的な質の高い豊かさに覆われた画一的イメージに夢想するのに対して、中国人学生の考える「国際化」は、国境を超えた「経済」や「人の移動」、「外国情報の入手」、「国際標準を持つこと」等、グローバル経済に関連した具体的な情報の動きや情勢の変化を想起させるものとなっていた。こうした捉え方に加えて、「国家の解放や発展」、「民主化」、「地球資源の共有」等、国家を単位とした国際政治的なニュアンスで「国際化」を捉えていた。このように考える両者が実際の国際化場面で接触し、しかも競争的な状況におかれた時に、どのような異文化間の誤解や葛藤を起こしうるのか。類似の思い込みゆえに発生する葛藤、価値観のずれやそれが現実の行動様式に与える影響について探究することは今後の興味深い課題であると考えられた。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）

① Okunishi, Y., Tanaka, T., Tian, H.R. and Bai, Y.T. (2015) Identifying Contrasting Chinese and Japanese Cultural Values: Implications for Intercultural Youth Education. Open Journal of Social Sciences, 3, 34-38. http://dx.doi.org/10.4236/jss.2015.39006

〔学会発表〕（計６件）

① 奥西有理・田中共子・シミッチ山下ミラ 日中大学生の労働観に関する比較文化的検討、多文化関係学会第 14 回年次大会、2015.11.14、岡山大学
② Okunishi, Y., Tanaka, T.& Tian, H. Identifying contrasting Chinese and Japanese cultural values: Implications for intercultural youth education, The 2nd International Conference on Educational Psychology and Applied Social Psychology 2015.9.19, Shanghai, China
③ 奥西有理・田中共子　日中大学生における概念理解の国際比較：「競争」と「国際化」の捉え方、多文化関係学会第 13 回年次大会、2014.11.8、コラッセふくしま
④ Okunishi, Y. & Tanaka, T. Interpretations by Chinese College Students of Distinctively Chinese Traits Potentially Leading to Cross-cultural Conflict: Toward a comparative study with Japanese Youth, The 28th International Conference of Applied Psychology, 2014.7.11、Paris, France
⑤ 奥西有理　中国系日本人女性による文化的差異の認知と調整方法：日中文化メディエート手法開発への示唆、多文化関係学会第 12 回年次大会、2013.10.19、立教大学
⑥ 奥西有理　日中の個人間における意思疎通：実証研究から理論化へ向けて、2013 年多文化関係学会中国・四国地区研究会 2013.7.13、岡山大学

〔図書〕（計０件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
奥西有理（Okunishi Yuri）
岡山理科大学・工学部・准教授
研究者番号：50448156
(2)研究分担者
田中共子（Tomoko Tanaka）
岡山大学・社会文化科学研究科・教授
研究者番号：40227153